

マリアの賛歌の特徴

ルカ福音書1:39-56 (新改訳2017訳)

- 1:39 それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。
- 1:40 そしてザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。
- 1:41 エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツは聖霊に満たされた。
- 1:42 そして大声で叫んだ。「あなたは女の中で最も祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。
- 1:43 私の主の母が私のところに来られるとは、どうしたことでしょう。
- 1:44 あなたのあいさつの声私の耳に入った、ちょうどそのとき、私の胎内で子どもが喜んで躍りました。
- 1:45 主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。」
- 1:46 マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、
- 1:47 私の霊は私の救い主である神をたたえます。
- 1:48 この卑しいはしために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。
- 1:49 力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、
- 1:50 (そして) 主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。
- 1:51 主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。
- 1:52 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。
- 1:53 飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。
- 1:54 主はあわれみを忘れずに、そのしもベイスラエルを助けてくださいました。
- 1:55 私たちの父祖たちに語られたとおり、アブラハムとその子孫に対するあわれみをいつまでも忘れずに。
- 1:56 マリアは、三か月ほどエリサベツのもとにとどまって、家に帰った。

【祈りながら考えよう】

- (1) 46-47節で「私は主をあがめ、神をたたえます」と言わずに「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます」と言っているのは、なぜですか。
- (2) 49節で「その御名は聖なるもの」と歌っている意味を説明して下さい。
- (3) 50節の「主のあわれみ」は、「主の恵み」とどう違いますか。

【解 説】

ルカ福音書の(1:46-55, 68-79, 2:14, 29-32)は、「新約聖書の詩篇」と呼ばれる。中でも46節から55節は「マリアの賛歌」と呼ばれる。暗黒の夜空にきらめく星々のように、意味深長な語句がいくつもちりばめられている。その中から3つだけを取り出して考察する。新約時代のスタートを飾るにふさわしい喜びと感謝の賛歌である。



(1) 魂と霊を区別している

マリアは「私は主をあがめ、私は救い主の神をたたえます」と言わないで、《私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます》(46-47節)と言っている。魂と霊を区別している。魂と霊はどう違いますか(人の三部分の解説図参照)。

これはマリアが、自分の存在の奥底と人格の中心に至るまで感動させられていることを意味する。マリアはうわべだけで喜んでいるのではない。これは、福音が魂に及ぼす効果でもある。人々が、「救いの恵み」を本当に理解した時に生じる効果でもある。

(2) その御名は聖なるもの

49節で、《その御名は聖なるもの》と表現しているのは、どういう意味だろうか。

マリアはこう言っているようだ。

「私が主をあがめるのは、神が力ある方であるばかりでなく、神の聖さのためでもあります」

質問したい。「なぜ、神はひとり子を世にお遣わしになったのですか」

「なぜ、御子はカルバリ山の上で十字架についたのでしょうか」

その理由は、神が聖であられるため、すなわち「その御名が聖なるもの」であるためではないでしょうか。

神は世界を造られた。完璧なものとして造られた。悪い部分は全くなかった。傷一つなかった。神は世界をご覧になり、それを非常に良いと見られた(創世記1:31)。

しかしその後、罪が登場し、悪魔が悪を持ち込んだ。今や罪がはびこり、悪が蔓延している。

神の御名が聖なるものであるからこそ、神は罪を処理しなくてはならず、贖いを持ち込まなくてはならないのだ。

神は、聖なる神である以上、世界を今のように罪のうちにあるもの、悪魔の支配下にあるものとして放置することがおできにならない。

御使いのかしらガブリエルがその事実をどのようにマリア自身に言い表したかに注意してみよう。

《聖霊があなたの上に臨み…ます》(ルカ1:35a)

そして、それから、この驚くばかりの表現がある。

《生まれる子は聖なる者…と呼ばれます》(ルカ1:35b)

この救いに関わる一切の部分は聖である。キリストのうちには何の罪もなかった。キリストは、アダムの性質の中にあった罪を受け継がなかった。キリストは聖であられた。

キリストの教えの全体を通して、また、キリストが行われたあらゆるみわざにおいて、この聖という要素は常に目立っている。

キリストは赤ん坊として生まれた。だが、キリストは普通の赤ん坊ではなかった。罪とは一線を画していた。キリストのうちには何の罪もなかった。

さらに、十字架に目を向けてほしい。そこでは何が起きているのか。同じ「聖」という要素を見る。それは、罪に対する神の憎しみ、怒りである。神が罪を罰しておられるのを見る。

救いというこの大なる動きに関わる一切の部分は、最初から最後まで、「聖」によって特徴づけられている。

(3) 主のあわれみ

50節にある素晴らしい言葉、〈あわれみ〉を取り上げる。

《主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます》(50節)

And His mercy is on those who fear Him From generation to generation. [NKJV]

もし神が単に全能で聖なるお方でしかなかったとしたら、私たちには何の希望もない。もし神について言える内容が、「力ある方、その御名は聖なるもの」(49節)でしかなかったとしたら、私たちはみな完全に抹殺されるだけである。全世界は滅ぼされ、そこには何の救いもない。

しかし、50節のギリシャ語原文の最初には接続詞「καί (カイ)」がある。日本語訳では訳出されていないが、英訳では、「And (そして)」がある。この接続詞「そして」のゆえに、何と感謝なことだろう。神に感謝すべきかなである。

神は「力ある方、その御名は聖なるもの」だけではない。「そして」がある。

《(そして)、主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます》

だから、私たちは救われることができるのである。

〈あわれみ〉とは何を意味しているだろうか。その間に答えるには、それを〈恵み〉という言葉に照らして考察すると分かりやすい。恵みとあわれみは相伴い、恵みはあわれみに先立つものと言われている。

「恵み」とは、有罪であるがゆえに何の優しさにも値しない者たちに対して差し出される愛、思いやり、いつくしみである。それが恵みの意味するところである。

「あわれみ」とは何だろうか。あわれみとは、ただ単に有罪であるだけでなく、自らの罪責のため悲惨さに陥っている者たちに対する愛を意味する。それが「恵みとあわれみ」の違いである。恵みの方が事を大きくとらえており、あわれみは、よりきめ細かな目を注ぐ。「主のあわれみ」とは、悲惨さと苦悶と苦痛とに陥っている人間たちをご覧になり、慈悲を施すことを意味する。

主イエスは病人、悪霊につかれた者、取税人、罪人などをあわれみ、あわれみを求める彼らの声にこたえて、彼らをいやし、助けられた(マタイ15:22, 20:30, マルコ9:22, ルカ18:38)。

神は人間をお造りになったが、人間はその愚かさにかまかせて罪に陥った。そして、「そこで人間は自らの悲惨と不幸と惨めさに陥っている。だが、この尊厳ある永遠の神は言われる。

《わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。

わたしは彼らの痛みを確かに知っている》(出エジプト3:7)と。

「あわれみ」こそ、イエスがベツレヘムでお生まれになった理由である。だからこそイエスは、あれほどの貧しさの中に進んでおいでになった。だからこそ、ご自分の栄光のしるしを脇に置き、自らを卑しくし、無にされたのである。

神は私たちの悲惨をご覧になられた。私たちの罪責ばかりでなく、私たちの悲惨さ、私たちの不幸、私たちの惨めさ、罪の結果としての世の状態をご覧になってくださった。マリアは、「主のあわれみ」ゆえに神を賛美している。

